

森と自然を活用した
保育・幼児教育に関する自治体勉強会

基調講演

自然を活用した保育・幼児教育の 現状と展望

上越教育大学 山口美和

本日の内容

- 保育・幼児教育の重要性
- 幼児期の教育の基本
- 「自然保育」とは何か
- 「森のようちえん」について
- 新・幼稚園教育要領／保育所保育指針に照らした「自然保育」の意義
- まとめ

保育・幼児教育の重要性

保育・幼児教育への注目

- OECD(2006) *Starting Strong II : Early childhood Education and Care*
(OECD保育白書 人生の始まりこそ力強く:乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際比較)
- 近年、OECD各国は、乳幼児期の教育とケア(=ECEC)に積極的に投資するようになり、チャイルドケアの問題は、選挙の争点にも押し上げられている。



乳幼児期の教育の重要性が世界的に認識されつつある

Ex: 幼児教育無償化・待機児童問題の争点化

非認知的スキルの重要性

Heckman, James. J “*Giving Kids a Fair Chance*”

(ジェームズ・ヘックマン『幼児教育の経済学』)

人生で成功するかどうかには、認知的スキルだけでなく、
非認知的な要素もまた欠かせない。



肉体的健康、精神的健康、根気強さ、注意深さ、意欲、自信
＝社会的・情動的性質

これらのスキルのほとんどは幼少期に発達する

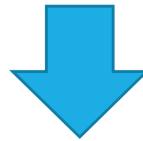
幼児期の教育の基本

幼児期の経験の特徴

- **五感**を通して感受される知覚を基盤とした具体的かつ総合的な経験
 - cf: Piaget 感覚運動期(0-2歳)
 - 前操作期(2-7歳)
- 環境への**能動的**な働きかけ(好奇心)
- 人やモノとの**相互作用**を通じて形成されるイメージ
- **試行錯誤**による学び

幼児期にふさわしい経験の保障

あそびを通して身体感覚を伴う多様な経験をすることが重要



あそび = **自由で自発的**な行為（活動）

「命令されてする遊び、そんなものはもう遊びではない。」
(ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』)

幼児期の教育の基本

- あそびを通して、主体的に環境に関わることにより、豊かな感性、好奇心や探究心を培う
→生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる
- 友達や保育者との信頼感・安心感を基盤として、協力して生活を送り、人間関係の基礎を築く
→役割意識、集団への帰属・貢献意識の基盤となる

幼児期の発達を促す環境とは？

- 能動性・主体性の発揮できる環境
 - 存分に対象に関わることができる場所・時間
 - 好奇心をそそる環境・日常生活と地続きの環境
- 発達に応じた環境からの刺激
 - 多様性に富んだ、魅力的な環境
 - 働きかけてみる→変化が現れる・・・応答的な環境
 - 人間の生活に即した変化、循環、繰り返し

人工的な環境では実現が困難

→ **自然**の持つ多様性・応答性・循環性

幼児期に自然と関わる重要性

新・幼稚園教育要領 第2章

領域：環境 「内容の取り扱い」

幼児期において**自然のもつ意味は大きく**、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに**直接触れる体験**を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、**幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。**

遊びの中で環境に関わる

新・幼稚園教育要領 第2章

領域：環境 「内容の取り扱い」

幼児が、**遊びの中で周囲の環境と関わり**、次第に周囲の世界に**好奇心**を抱き、その意味や操作の仕方に関心を持ち、**物事の法則性**に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。

「自然保育」とは何か

「自然保育」とは

自然環境や地域資源を活用し、屋外を中心とする子どもたちの直接的な体験活動を積極的に取り入れる保育・幼児教育。子どもが本来持っている「自ら学び成長しようとする力」を育むことを重視する。



「森のようちえん」だけでなく、幼稚園、保育所、認定こども園等における保育内容も包括する概念



自然体験

戸外で身近な自然と日常的
に触れ合う体験



五感を使って自然を感じ、
味わい、その美しさや不思議さに気づくこと



鎌でラケットを削る少年(昭和28年)
『信州子どもの20世紀』より

生活体験

人間が社会で暮らしていく
ために必要な「生活力」や
「生きる力」を育む体験



手足や身体を使った技術・
技能・コミュニケーション力

「森のようちえん」について

森のようちえん forest kindergarten

- 森などの自然豊かな環境の中で、子どもの直接的な体験と主体的な遊びを重視した保育・幼児教育を行う施設。
- デンマーク発祥。ドイツ、北欧、オーストラリア、日本など、世界各地で盛ん。
- 日本では、約35年前に始まり、徐々に発展。10年前頃から全国で急増。現在、全国に約180以上の団体がある。(うち約130園が「常設型」)

日本の「森のようちえん」の類型

ドイツ・北欧型

自然の中での子どもの主体的な遊びを目的とするタイプ

共同保育・自主保育型

保護者が自分の子どもの保育に主体的に関わることを目的とし、複数の家庭の保護者が交代で保育当番を行うタイプ

自然学校型

週末や休日に開催するタイプも。冒険教育や環境教育との親和性が高い

「森のようちえん」の活動形態

① 認可幼稚園・認可保育園

自然散策や遠足、お泊まり保育、畑の活動などの自然体験活動

② 自主保育や共同保育、育児サークル、子育てサロン・ひろば

野外を中心とした自然体験を意識した保育活動など

③ 認可外保育施設・NPO法人などによる幼児教育や保育活動団体

自然体験を意識した幼児教育など

④ 自然学校や自然体験活動団体、青少年教育施設、社会教育施設

さまざまな野外活動プログラムを活かした幼児教育

※森のようちえん全国ネットワークの活動分類より

「森のようちえん」の保育の三つの特徴

- 園周辺の自然環境や地域資源の活用
山・川・森など地域に根差した日常的なフィールドを利用
→ 日常性・コミュニティに根ざした自然体験活動
- 子どもの自発的なあそびを重視
大人(保育者)は、極力あそびをリードしたり助言したりせず、子どもの中から生まれる創意工夫や試行錯誤を見守る
→ 一人の主体として尊重される経験の蓄積
- 生活における子どもの主体的決定を尊重
テーマに対する意見を出し合い、子ども同士の議論に基づき決定・実行
→ 集団生活への主体的な参与と役割意識

日本の「森のようちえん」の課題

園舎の施設設備や職員配置が国の基準を満たさない等の理由で、国の認可を得ることができず、NPO法人などとして運営しているケースが多い。

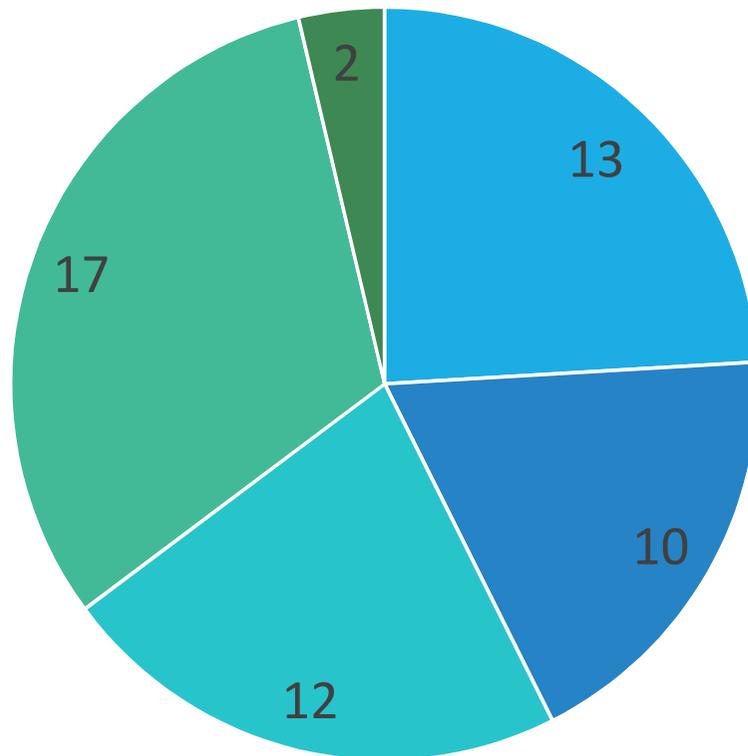


国からの補助金が得られないため経営が不安定



先進的な地方自治体が制度を創設して、「森のようちえん」等を含む「自然保育」を支援・推進する動き

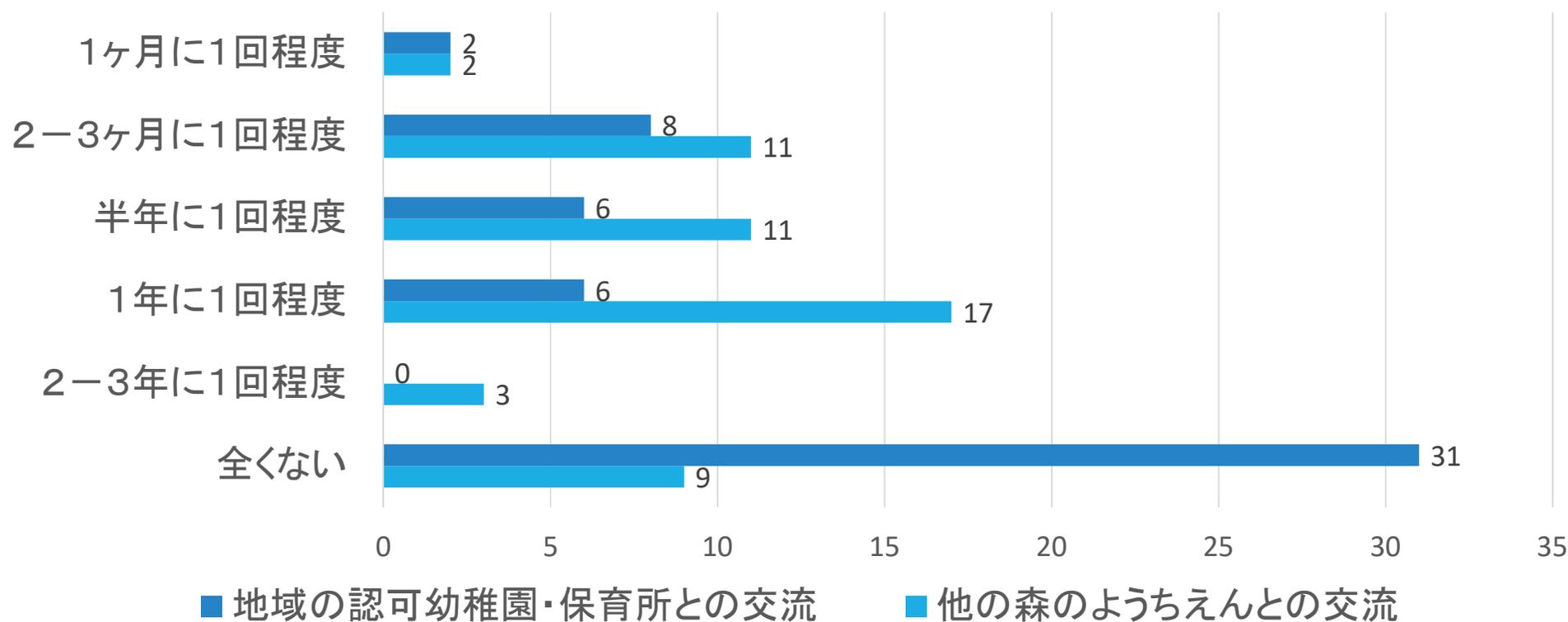
森のようちえん 活動に対する自治体の支援・理解



- 活動に対して理解があり具体的な支援や協力をしてくれる
- 活動に対して一定の理解はあるが支援はしていない
- 活動に対して関心は持っているが、あまり内容を理解していない
- 活動に対して無関心である
- その他

常設型「森のようちえん」機関調査 N=53
(発達保育実践政策学センター 2016年度SEED研究)

森のようちえん／地域の認可園の 保育者との交流・学びの機会の比較



常設型「森のようちえん」機関調査 N=53
(発達保育実践政策学センター 2016年度SEED研究)

なぜ「森のようちえん」の認知が進まないか

幼児期の本来的な教育のあり方を追求した最終形態
(自然の中での子どもの主体的なあそびを中心とした保育)
＝「森のようちえん」



なのに、なぜ社会的認知や理解が進まないのか??



「認可」(国によるお墨付き)の壁

保育の「質」の観点からの評価

- 保育の質を測るための指標

- 志向性の質 : 保育の方向性、目標
- 構造の質 : 施設の広さ、物理的構造基準、保育者の配置
- 教育の概念と実践 : 保育の具体的な内容
- 過程(プロセス)の質 : 保育者と子どもの相互作用、環境構成
- 実施運営の質 : 運営体制、チーム・シフト体制
- 子どもの成果の質 : 子どもの心身の成長の保障

日本では構造の質(施設基準)が「認可」の大きなハードル

保育内容やプロセスをもっと重視すべきでは??

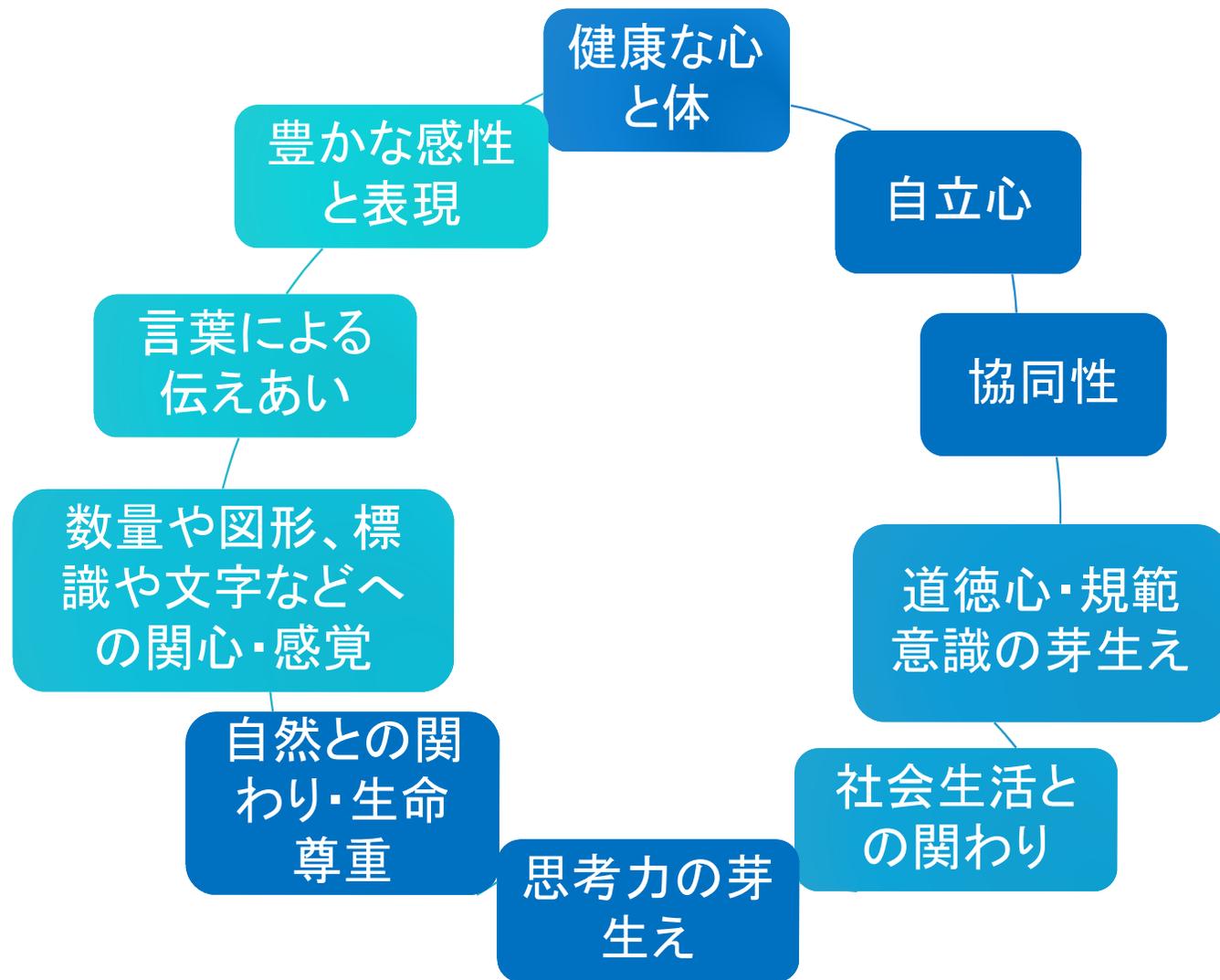
各自治体による積極的な評価が不可欠

新・幼稚園教育要領 ／保育所保育指針に照らした 「自然保育」の意義

幼児期の学びを捉えるために

- 総合的で、多様なものが複合的に浸透し合った幼児期の学び
- 総合的な幼児期の育ちと学びを、さまざまな側面から見るための視点(窓)としての「5領域」
 - ＝健康・人間関係・環境・言葉・表現
- 能力や到達度で評価するのではなく、主体的に環境に働きかける**心情・意欲・態度**を重視する。

幼児期の 終わりまでに 育てて欲しい 10の姿



健康な心と体

幼稚園(保育所)生活の中で、充実感をもって
自分のやりたいことに向かって心を体を十分に
働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安
全な生活をつくり出すようになる。

自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、**自分の力で行う**ために考えたり、工夫したりしながら、**諦めずにやり遂げる**ことで達成感を味わい、自信を持って行動するようになる。

協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす
る気持ちをもって関わるようになる。

まとめに代えて

「自然保育」における保育者の役割

子どもが自然の中で自ら環境に働きかけ、主体的に行動する機会を保障する

教えすぎない

- 子どもが自分で発見する喜びを奪わない

分かち合う

- 子どもと同じ視線でそのものを見て喜び味わう

待つ

- 「放置」ではなく、出来事の進展を期待しながら見守る

「自然保育」と主体的な体験

「自然保育」の普及によってもたらされるものは・・・

多くの子どもたちに、自然の中での直接的な体験の機会を保障すること。



好奇心・挑戦心・創造性・協調性・レジリエンスetc

社会情動的スキルの育成

困難に負けずに**幸せな人生を歩むための土台**

幼児期の教育のあるべき姿を求めて

各自治体における「自然保育」の支援・推進



本来あるべき子どもの幸せを保障するムーブメント



自分の生きる世界に対する基本的な肯定感
国を動かすムーブメントへ・・・